

目的 現代日本文学を手掛りに家庭がどう受け取られているかを見た。そこには人間の創造性や活潑な発展を腐蝕させる家庭の諸悪が共通に認められた。家庭の桎梏から脱出することが人間の生きるべき道として説かれたのである。しかしいかなる方法に基づいて生きればよいのか、という具体的プロジェクトを何も示してはいない。それはたんなる家庭否定の現代的精神を虚構の中に定着したにすぎず、創造的論拠に欠けていよう。この中で果して人間は生きれるのであるか。

方法 現代なるがゆえに相互に確認し合っておかなければならない家庭のもつ意義を前回に附加して、O, P, ボルノ一の〈家の哲学〉を中心に吟味検討する。

結果 ボルノ一哲学の根底にある概念は〈被護性〉である。それはまた哲学にとどまらず多領域にわたる思想の集約として帰結されている。したがって、家政学の根底としてのみならず、その周辺の諸学問の中核に措定しても十分にその効果を発揮する。家庭なしの人間生活は考えられない。現代においての急務は故郷喪失のアンチテーゼとしての故郷希求であり、それを哲学的に問いつめることであろうと考える。